

13期 北摂の歴史ロマンを愉しむ（2月①）

日時：2月13日 午前10時～12時

教室：高槻センター街ビル

講師：市立枚方宿鍵屋資料館 学芸員 片山 正彦 先生



内容：「江戸時代の淀川舟運と高槻・枚方」

(要旨) ■はじめに

- ・近世において多量の物資や旅客を運ぶ場合、船による水上輸送が、最も有効であった。特に、淀川は比較的流れが緩やかで、豊かな水量を持ち水上輸送に適していた
- ・淀川舟運の代名詞と言われる「三十石船」と「くらわんか舟」について解説する。

■三十石船の歴史と高槻・枚方

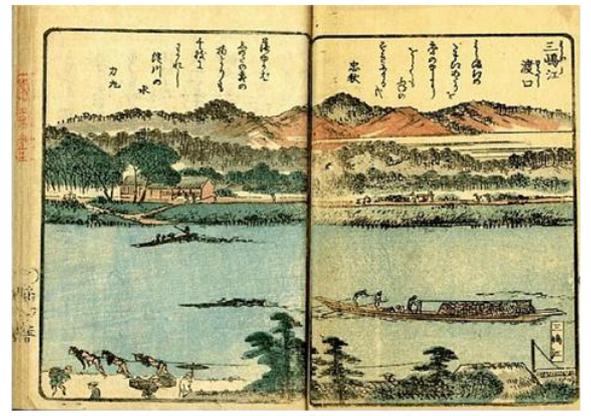


奥：「三十石船」 手前：「くらわんか船」 (歌川広重 京都名所之内 淀川)

- ◎三十石船とは、大阪・伏見間を上下する淀川の30石積旅客船をさし、長さ約11.1~15m 幅約1.8~2.1m、水夫・船員は4人、乗客定員28人であった。伏見・大阪間の下りは約6時間、上りは約12時間を要し、運賃は上りが下りの倍額で、上りは陸路(京街道) 下りは船を利用する人が多かった。また上りでは随所で陸上から船を曳く必要があった。
- ◎住本の辺りは土砂が溜まるので、川堀人夫が川を浚って、船が通行しやすいようにした。その際、船客が川堀人夫を助力するか銭を払う風習があった。
- ◎和歌で知られた三島江付近では、上り船は昼夜にかかわらず歌を謳い、曳舟をしていた。芦間に蛍が飛び交い、ほととぎすが鳴いたりして、和歌の種にあふれていた。



淀川兩岸一覽(三島江) 左面に陸上から船をゆく水手などが目える。



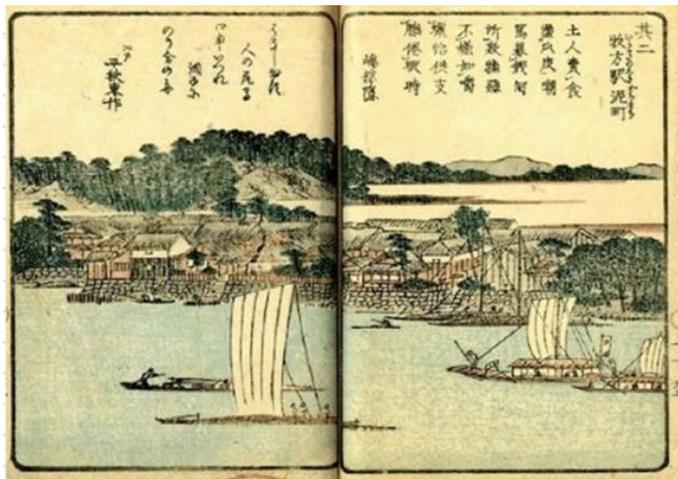
(三島江渡口) 手前は三島江、対岸は枚方宿



◎「淀川三十石船舟唄」

現在三十石船は航行していないが、淀川右岸の大塚地区では三十石船の舟歌が唄い継がれている。三十石船が航行する兩岸の風物を唄い、船客を楽しませ船がどのあたりを航行しているか知らしていた。唄が特に大塚に永く伝わったのは、対岸の枚方との関係や渡し船が昭和初期まで残存したからであろう。

◎枚方は京都・大阪のほぼ中間に位置し、淀川舟運の中継港として、また街道の宿場町として繁栄した。宿場には、本陣、脇本陣、家老専用本陣があり、旅籠の数69軒。人足100人、馬100頭を常備していた。また、河内名所図会(枚方駅)には「飯盛女百人むかしよりありける」とある。



淀川兩岸一覽(枚方駅泥町)



河内名所図会(枚方駅)

◎鍵屋は枚方宿の西見付(大阪側入口)近くにあった代表的な船宿兼旅籠。多くの使用人、飯盛女を使い、くわんか舟を所有。表玄関を街道に開き、裏口は淀川に接する好立地であった。「ここはどこじゃと船頭衆に問えば、ここは枚方鍵屋浦、鍵屋浦には碇はいらぬ、三味や太鼓で船とめる。」と三十石船舟歌で唄われた。

■くらわんか舟の歴史と高槻・枚方

◎三十石船の客を相手とする煮売茶舟「くらわんか舟」の始まりは、大阪夏の陣のとき、住本の船頭が徳川方に協力した功により、幕府から淀川での独占的茶舟営業権を与えられたことにある。茶舟株20株(舟)の内、1株(舟)を持つ亀屋が枚方の過書船番所に出向、茶舟を始める。住本と競うこととなったが、地理上の有利さから、次第に枚方側が勢力を持つようになった。

◎「貨食舟(煮売舟)はこの名物で、夜となく、昼となく、粗末な小舟に、飯、酒、汁、餅などを備え、上り下りの通行船を目がけてカギのような物をひっかけて、荒々しく苦を引き上げ、居眠りしている客を起こして、やかましく酒食を商った。

俗にこれをくらわんか舟という。」

淀川兩岸一覽(枚方駅)

あきん人「われもめしくうか。ソレくらえ。そっちやのわろはどうじゃいわい、ひもじそうな頼してけつかるが、錢ないかい。」

弥次 「イヤ、このべらぼうめら、何をふざきやあがる。」

のり合 「この汁は、もむないかわり、ねからぬるうていかんわい。

あきん人「ぬるかア水まわしてくらいおれ。」

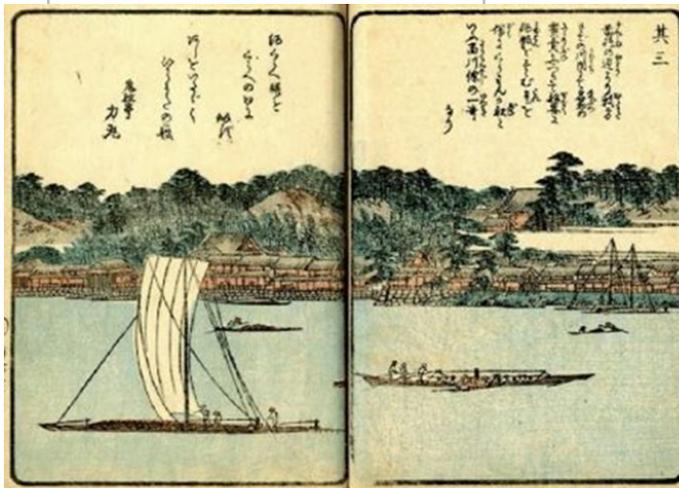
のり合 「何ぬかすぞい。そして、この芋も牛蒡もくさってけつかる。」

あきん人「そのはずじゃ。えい所はみなうちで焚いてくてしもうたわい。」

(東海道中膝栗毛)

このように、くらわんか舟の乱暴な言葉遣いが名物であった。

(舟には無作法御免の特権が 与えられていた。)



其三

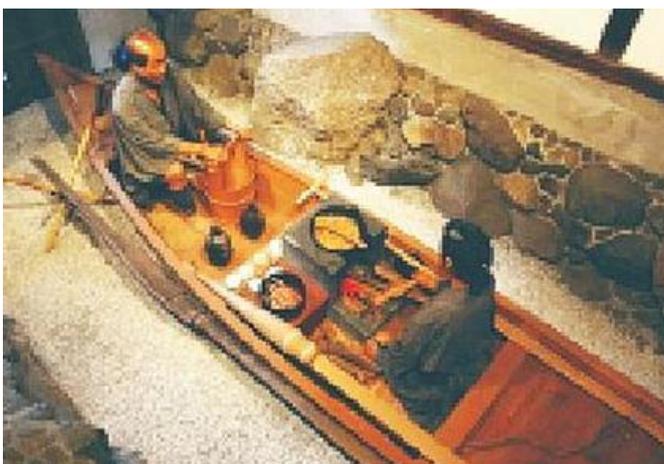
前嶋の辺りより、枚方までの川内にて、名物の煮売舟つきて、船客に酒飯をすすむ。是を俗にくらわんか船といふ。

当川条の一奇なり。

酒くらへ餅をくらへの口に似ず

あしをいただくひらかたの船

鬼拉亭 力丸



◎くらわんか舟は二人乗りの煮売舟。

三十石船に横付して、ごんぼ汁、あん餅、巻き寿司、酒などを売った。使用したくらわんか椀が川底などから発見されている。

■おわりにー淀川舟運の衰退と再興

- ◎明治期に入ると淀川に蒸気船が航行するようになり、三十石船・くらわんか舟が衰退。枚方宿も、本陣や伝馬所などの公的制度や機関の廃止等に加えて、淀川右岸（高槻側）に鉄道が開通して、人や物資の流れが変わり、往時の賑わいを失った。
- ◎明治43年頃、くらわんか舟や三十石船が観光を目的に再興された。現在も枚方には船着場があり、観光シーズンには屋形船や水上バス・外輪船が運航されている。
- ◎鍵屋は、しばらく蒸気船の乗降場として利用されたが、料亭・料理旅館に営業転換。これも1997年に廃業し、主屋などを枚方市に寄贈。市は解体・復元の後、2001年7月市立枚方宿鍵屋資料館として開館した。

ー「今日のひと言」ー

- 淀川における三十石船とくらわんか舟について学びました。数々のエピソードの説明など史料に基づき興味深かった。
- 淀川沿いの舟運が昔より賑わっていたことが、江戸時代の資料から窺える。当時の三十石船に乗って沿岸の景色を眺めて見たかった。
- 高槻側からと枚方側からみた「くらわんか舟」興味深く聴けました。長い道中の一時の気分転換にも当時の人々もなっただと思います。
- 枚方宿の飯盛女について、シーボルトも「江戸参府紀行」の中で「枚方は大坂の住民が遊樂地として、よく訪れる大きな村で、そのため町には飯盛女が多い。」と記す。枚方宿は参勤交代、官用客などを受入れる負担が大きいのと、淀川航路では下り客が多いが上り客が少ないなど需要にばらつきがあって、飯盛女を雇って遊興目的の客寄せをしていたからだと思います。さて、京都の住民は・・・？

<班活動>

午後からは、班別に分かれて、3月13日（金）の「学習成果発表会」の準備を行った。

- 個々人の学習内容の確認と班テーマとの整合性、発表のストーリー作り、発表者の割り当て、時間決めなど、取捨選択、喧々諤々、熱心な討議が展開された。ほぼまとまりつつある班、あと一息の班、さらに深掘する班、いずれもあと1か月。チームワークを発揮した成果発表が期待される。

（4班広報）